

「母」たちをめぐる声

——李恢成『砧をうつ女』、『またふたたびの道』にみる樺太の記憶

奥村華子

一 はじめに

北海道の北に位置するサハリン島は、一八七五年に樺太・千島交換条約においてロシアが領土権を得て、流刑植民地として経営が開始された。一九〇四年に始まった日露戦争の末期に日本軍はサハリン全島を占領。翌年のポーツマス条約によって島の南半が日本帝国へ編入され、一九〇七年の植民地政庁設置により、「樺太」は誕生する。

天野尚樹が指摘するように、この島は帝国日本の北辺域であつたために、膨張、縮小し、人の流れを規定した。当初より樺太では、資源根拠地としての運用と「国内化」のため、定住者を植え付ける移住植民地化が急務とされていたのである。¹⁾

このような場において、むろん国境の確定とは、地政学的な意味のみを成さない。戦前の移住奨励、そして戦後の引揚げと

いう移動の経験に代表されるように、国境線の変動は、そこで生活していた人々の記憶と身体に刻印される。村田裕和は「占領」と「開拓」の重層的な関係において、空間の性質変化は瞬時に起こるのではなく、人々の意識の中で進行していくと述べるが、²⁾こと樺太においては、それは大規模な居住地の変動と、そこから離れてなお残る場所の記憶として、経験された。本稿は、九州の炭鉱から樺太へと渡った両親、そして戦後に離散した家族を描いた、李恢成の初期作品の分析を通し、樺太における在日朝鮮人女性の経験の一端を取り上げることが企図する。

本稿で取り上げる、「またふたたびの道」『群像』一九六九・六）、「砧をうつ女」『季刊芸術』一九七一・七）は、これまで在日朝鮮人女性の物語としては受け取られてこなかった。それを喝破したのは、朴裕河と平田由美で、両者は「ポスト国家／ポスト家族」と題された特集『思想』二〇〇三・一一）にお

いて対をなしつつ、在日朝鮮人文学を迎え入れた一九七〇年前後の文壇を批判する。ともに危機感を示すのは、李恢成の作品が、民族や国家という政治的主題へ直線的に接続されることだ。そこでは、作中で描かれる、実母と義母に働いた抑圧や、ジェンダー的力学が組上に上げられることはない。⁽³⁾

周知のように、李恢成が熱狂をもって文壇に迎え入れられたとき、脱イデオロギー的傾向をもつ作家らが「内向の世代」と指摘され、その反面、在日朝鮮人による文学は社会性を備えたものと評価を受けていた。⁽⁴⁾ 選評が示すように、「私小説」的傾向をもった李恢成の初期作は「朝鮮人全体の悲惨な運命」⁽⁵⁾と日本社会への問題提起として解された。それは、在日朝鮮人を多面的に捉えることで、「自然に、かれらと対比して、日本人を多面的にとらえる」ものであるからこそ「われわれのための李恢成」⁽⁷⁾と称揚された。朴が鋭く指摘するように、「在日朝鮮人文学」というジャンルは、北朝鮮への帰国事業が落ち着いた折に、あくまで「外国人」として、日本社会を照射することで文壇から与えられた。かさねて平田は、このような志向のもと、母や娘をめぐる問題が民族性や国家に奉仕する形でのみ取り上げられてきたことを批判し、新たな読みを強く要請する。

朴と平田の指摘は、特異な経歴の男性作家に、長く「正統」⁽⁸⁾たる在日朝鮮人作家という評価が与えられてきたこと、そしてそれを可能にした力学の是正を促している。近年、在日朝鮮人女性の文学的営為が捨象されてきたことが提起されている

ことをふまえれば、いま「樺太」という特質のもとに、李恢成の作品を取り上げることには何を意味するのか。本稿では、「聞き書き」という枠組みを参照し、テクストに描かれた出来事、樺太における朝鮮人女性の姿が織り込まれたものとして読み直す。具体的には、二人の「母」について検討を行う。

「聞き書き」は、狭義には、ある人の経験を他者が、聞き書き取る営為を指す。文字史料に拠る歴史とは異なったオーラル・ヒストリーや証言記録として注目を集める一方、⁽¹⁰⁾とりわけ文学研究において重視されるのは、語り手と話し手によって成り立つ「多声性」の意味するところである。佐藤泉は、「聞き書き」を、記録か文学かという二分法を無化する新たな「文学性」を備えたものと定義した。これは、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの作品のように、人々の証言記録を編む営為に、文学性を認めることだけを意味しない。今日、水俣病患者による証言の真正な記録ではないと明らかな石牟礼道子『苦海浄土』(講談社、一九六九年)に記録性と多声性を認めることでもある。⁽¹¹⁾ 渡辺京二が想像的な「私小説」だと解説を加えたこともある石牟礼の作品は、しかし医師の報告書等の記録を含み、かつ「私」個人による想像物でなく集団的な創造物たらしめる『サークル村』に掲載されていた。佐藤は、語り、聞くという相互行為から成り立つ「聞き書き」の言葉を、単一の声や独立した客観的事実があるという認識を組み替えるものとして意味付ける。⁽¹²⁾

そのような意味で、「聞き書き」とは、オーサーシップを個人に帰すのではなく、「書く」ことに「聞く」ことが先行すると想定することで、他者との交渉からなる言語の生成過程を顕在化させるものだといえる。このような性質をふまえたうえで、本稿で行うのは、李恢成の作品を対象に、他者の声を「聞く」という行為を前景化して、母の経験を小説として「書く」ことの意味を問うことである。むしろ、本稿で取り上げるのは小説であり、作品が「聞き書き」だと主張するのではない。しかし取り上げる二作は、作家に似た来歴の語り手が、家族の語る母の記憶、あるいは義母の経験の「聞き手」と設定されている。このような「聞き手」を軸に、母たちの姿はどのようにして描かれているのか。

これまでも李恢成による作品は、樺太における家族の経験を描き、戦後社会を批判する戦争体験の「証言」とされてきた¹³。だとすれば、同時に問われなくてはならないのは、「証言」を提示する手つきだろう。本稿では、二節において「砧をうつ女」を対象に、祖母、父、そして二人の声を聞く語り手によって母の記憶が語られることを取り上げる。続く三・四節では、「またふたたびの道」を取り上げ、母の死後にやってきた義母の「独白」が、複数の宛先へ受け取られていく様相を検討する。

二 『砧をうつ女』——母を語る「声」たち

李恢成は、一九三五年に樺太・真岡町（現サハリン・ホルムスク）に黄海北道出身の李鳳変と慶尚北道出身の張述伊の三男として生まれた。終戦前年の一二月に母が亡くなり、翌年義母を迎える。四十七年七月樺太を引揚げるが¹⁴、函館についたのち密航者として九州に強制送還され針尾島収容所に収監、札幌に落ち着く。引揚げ時、祖父母と、義母の連れ子の義姉、従兄弟はサハリンに残された。早稲田大学露文科を卒業後、五年ほど朝鮮総連中央教育部、朝鮮新報社に勤務し、その傍ら創作活動を始める。ほぼ、このような来歴に沿って、綴られたのが本稿で取り上げる二作である。うち本節で分析する『砧をうつ女』では、一九七〇年の秋に母の出身地である慶尚北道を訪ねたことを契機に、敗戦前に亡くなった母を回想しつつ書かれた。

先行研究では、おおむね母の記憶をめぐる語り手（＝作者）の民族意識が論じられてきた。金貞愛は自身の身の上を愚痴として語る「身世打令」が、本作では、母の追憶を語る「身世打鈴」へと置き換えられていることを、民族精神のポジティブな表出であるとした¹⁵。西成彦と山崎正純は、結末の母の表象が、作者にとつて「朝鮮人意識」を凝固させるものになっているとした¹⁶。力点が異なるのは林相珉で、父、母の描かれ方が一枚岩ではないことを、朝鮮と日本の間にある作者の立ち位置の象徴と読む¹⁷。前述の朴の論では、母とその死にナショナルな志を与え、〈民族の娘〉の物語とすることで「在日朝鮮人文学」を求める期待に沿おうとしたと、作家と文壇の共犯関係が批判され

ている⁽¹⁸⁾。朴の批判は、このような囲い込みが家庭内での夫の暴力を隠蔽しているとする点で、重要な意義を持つ。しかし本作に、母の経験を読み込むことも可能ではないだろうか。

先行研究で共通して等閑視されてきたのは、現在の視点が介入しながら、一九四四年の母の死を回想するという構造である。このとき、たとえば金のいう、祖母の「身勢打鈴」が、李恢成の手で小説として継承されたという指摘は修正を要する。本作は、語り手が「聞き手」に据えられ、祖母は「娘」の姿を、父は「母」の姿を語る。語り手は、このような祖母と父の声と、語り手自身が見聞きした記憶を、後年の視点を交えて繋ぎ合わせ、母の姿を再構成しており、単なる継承を行うものではない。まずは祖母の「身勢打鈴」の描写から、本作の特徴をおさえてみよう。

母の死後、少年時代の語り手は、嘆き語る祖母の「聞き手」となる。語り手は、それが「身勢打鈴」であることを「後で知った」(二五三)といい、「僕はこの老婆をいささか持て余し気味で眺めている」(二五四)という。むしろこれは後年の認識で、祖母の嘆きを「身勢打鈴」と判断するのは、かつての自身を俯瞰し得ることだ。「身勢打鈴」は、「耳を澄ませば(中略)甦ってくるようだ」(二五三)と、はじめ祖母の声を想起することによるものだったが、徐々に語り手の想像する情景描写などが加わり、語り直されていく。重要なのは、「身勢打鈴」の合間や後に、祖母が直接見聞きしたのではない記憶が接続されていく点だ。

祖母の語りの合間には、「一九三九年」に幼い語り手が、着物を着た母と共に里帰りした記憶が挿入されている(二五五)。しかし実際に張述伊が故郷へ戻ったのは、翌年である⁽¹⁹⁾。あえてこの年と明記されるのは、おそらく中央共和国の発足に伴い、一九三九年から日本語の普及や「内地服」(着物)の着用等の同化政策が推進されたことを背景にすえるためだろう⁽²⁰⁾。李恢成の両親が従事した炭鉱は、他産業より労働条件が見劣りするため、この年から朝鮮南部の農村の「過剰人口」滞留地域に対して、積極的募集を行い、労働の担い手以外の家族の呼び寄せを奨励していた⁽²¹⁾。語り手の記憶を導きに時期が明記されるのは、祖母が「国を奪われた上に娘まで攫われ」たと嘆く一方、そんな非道を働く「盗つ人の国」(二五四)から戻らないことを「この馬の骨とも知らぬ男をいっぱしに啣えこんで……」(二五五)と、娘が貞淑さを欠くかのようにいうのに抗して、歴史的背景を強調するのではないか。そのうえ語り手は、一人娘としてしつかりした夫を迎えるよう望まれていたのに反し、母は邑で砧をうつ人生から逃れるために日本へ渡ったのではないかと想像させるのだ(二五四)。

加えて、「身勢打鈴」によると(中略)その女は眼に涙を浮べて「母さん」と老母に駆け寄っていた」(二五六)と、述伊の帰郷の時点で祖母の語りは一度閉じ、祖母の娘、あるいは語り手の母ではなく、「張述伊」と父の会話が三人称で記述されている。ここで祖母の不在時に披瀝されるのは、述伊が生みの母と育て

の母との間で板挟みになっていたという動機だ。会話が実際のものは定かでないが、祖母の知らない母の姿が、母自身の声として描写されていることは看過できない。なぜなら、このような語りの繋ぎ合わせは、父による母の語りでも生じている。

夫から暴力を受けた述伊が、トランクを手に出奔を試みる箇所がある。朴は、家を出る母がいちど詰めた日本の着物を裂き、チヨゴリ、チマを押し入れから入れ直す箇所を指し、前述の祖母の「身勢打鈴」同様、母の死を「国を奪われた朝鮮の女の悲しい運命」に回収するものと批判した。⁽²²⁾直後に、述伊の死後、父が押し入れから母の愛情の結晶のような、整えられた子どもらの衣類を見つけ涙したとあり、一見崇高な母の姿が描かれるかのような箇所ではある。しかし前述のように、その直前には、理想的な母像に相反し、家から逃げ出すことを試みた女性の姿が差し挟まれている。そして重要なのは、逃亡を阻んだのがほかならない語り手だったと描き込まれている点だ。

述伊が家を出ようとした際、その足を止めたのは子どもらの「非難と哀願のこもった声」(二六五)だった。家の敷居を跨いだとたん、子どもの声を聞き、女性はいくまゝ。その姿は、母であることをやめ他人のようにも見えるのに、ふたたび敷居を越え、母へと呼び戻される。これは、追い縋る子どもの頃の自分が、ある女性を母の座に封じ込めてしまった記憶である。後年の語り手は、自身らの声が「母の耳にせめぎこんでいった」(二六五)ことが、母の決意を崩したと明確にいう。

李恢成は、一九九一年に本作が再度単行本化された際、次のように述べた。

母のことを書くこうすると、私はその追憶のために筆がとまりがちであった。けれども、その追憶に流されずに、母の生涯を、男と女の力関係の中、社会の抑圧という二重のくびきの中でとらえようと試みたつもりである。そうすることだけが、彼女の短い人生をはかるのにふさわしい距離と方法であったといまでも思っている。⁽²³⁾

子どもが「二重のくびき」そのものではないにしても、長じた語り手に、それに加担した責任が感じられるのだとすれば、母の声をそのまま代弁することはできない。加えて西成彦が指摘するように、語り手の言語活動は、朝鮮語と日本語の「家庭内の二言語間コードスイッチング」から成り立っていた。⁽²⁴⁾敗戦以前に日本語教育を受けていた李恢成が朝鮮語を本格的に身につけるのは大学進学時である。⁽²⁵⁾作者とほぼ同様の環境が設定された本作では、母と祖母の言葉は方言のまじった朝鮮語、母と父の言葉は、二人が出会った炭鉱特有の言葉を含む日本語と朝鮮語の併用であつたかもしれず、語り手には把握しえなかった可能性もある。

母を語る祖母の語りでは、日本による植民地化を背景に、呂宋を出て樺太へ行けば節操のなさを咎められ、夫の語りでは、暴

力に耐えかねていたことは捨象され、美しい母として形象される。「聞き手」としての語り手が、理想的な娘や母像を語る祖母と父の声を描くのは、述伊が、死後も「二重のくびき」から自由でないことを示す。本作は、母を〈民族の娘〉として形象しようとするのではなく、むしろ母をめぐる声が、その死後にも、母をひとつの像に回収しようとする力学自体を浮き彫りにし、そのうえで両者の語りに収斂しない述伊の姿を混入させるものではないか。語り手は、自身も母の境遇や言葉を知悉していないために、母の真実の姿というようには描かない。しかし同時に、李恢成に似せた「聞き手」としての語り手は、小説に先行して、「自分の言わんとすることを十分に喋る余裕をあたえられなかった」(二六四)という述伊の、密かな声があったのではないかと想像させる。

炭鉱に暮らした戦前の朝鮮人女性とは、家庭内労働を一手に担い、外界との接触が少なく、朝鮮人男性に比してもその実態を明らかにする資料が少ない。⁽²⁶⁾ 本作において、「二重のくびき」に捉えられたものとして、朝鮮人女性の生を描くことは、そのような点でも意味をもつだろう。

母を語る人物らの声によって構築された本作に対し、次節では、「独白」のようにして語られる義母の声を主軸にした『またふたたびの道』を取り上げる。

三 「またふたたびの道」——「独白」の宛先

本節では、『またふたたびの道』を取り上げる。原題は「趙家の憂鬱」『群像』一九六九・六で、三章から成る。李恢成によく似た経歴を持つ趙哲午が、子供時代の回想を挟みつつ、敗戦直後に生じた一族の離散と、一九六九年前後の義母との別れを物語る。第一章は、一九四五年夏から四七年春の樺太真岡町(現・サハリン、ホルムスク)が舞台で、義母が趙家に来てから、祖父母と義姉・豊子を残し、引揚げるまでの回想が中心となる。第二章では父の死後に生じた義母の再婚をめぐる家族会議と、哲午の高校時代の友人・西条との再会が描かれる。第三章では、現在時において、哲午は義母が北朝鮮へ帰還しようとしていることを知り、妻・安熙に促されて義母のもとへ再び向かう。

梁明心は、戦時中の生活や戦後の家族との離別が繰り返し描かれる点を指し、作家李恢成の原点をサハリンに求める。⁽²⁷⁾ また、川原崎尚子はその半生を材に、一族の苦難と離散が在日朝鮮人の生活史として描かれていることを指摘する。⁽²⁸⁾ また、金貞愛は朝鮮総連時代に書かれた「その前夜」『統一評論』一九六四・九と比較し、祖国分断の状況が継続することで、小説世界にも変化が生じていると論究する。⁽²⁹⁾

義母の帰国をめぐる再び「家族」の分裂が生じることが主題だと前提とされる一方、契機となる義母やその語りは素通りされ、必ずしも十分には言及されてこなかった。⁽³⁰⁾ 三節と四節で

取り上げるのは、義母の「独白」（五八）と、そしてその声の
行き着く宛先だ。

義母の「独白」とは、第二章において、哲午のすぐ下の妹・
順南の詰難に応答し、再婚をめぐる「家族会議」で口をついて
出たものである。

「言えば言葉だと思って。言葉つてものは鉄砲玉と同じな
んだよ。いちど言ったらもうあとには戻らないんだから。
そりや、充分なこととはしてやれなかったかも知れない。で
もわちは二十五歳でやってきて、ずっと五人の子供を育て
てきた。こんなことは言いたくないさ。けれどあんまりだ
から言うんだよ。とうさんは、わちに逢ったとき、子ども
は二人きりしかいないと言ったのさ。それなら豊子を連れ
て三人何とか育てていこうと思ってつてきた。そしたら
どうだったの。ぞろぞろと五人も子供が出てきて——とう
さんはわちを欺して連れてきたのさ」（五七）

義母は、趙家に来るまで、義理の子が五人いると知らされて
いなかった。「ずっと子どもらを育ててきて年をとっちゃった」
という義母は、「これからでも自分で生きてみたい」（五八）と、
再婚を決意する。一章では、趙家と、なかなか義母に懐かない
子どもらの中で、居場所を得るため豊子に構わなくなる母の非
情が描写されるのに反し、二章では、母の口から、豊子を残し

た後悔と、家庭内での孤立感が語られる。『砧をうつ女』にも
通じるように、義母の苦しみの一因に、家族の存在があったと
明らかにする箇所だ。重要なのは、ここでの義母の言葉が「独白」
とされる点である。子どもらは、「歎きをどう受け止めてよい
のか困惑して」（五七）言葉を返すことができない。「静寂のな
かで」「いつまでも続いた」（五八）という義母の語りは、この
時点では受け手を欠き、宛先を宙吊りにされているかのように
うつる。

この「独白」に対する反応が示されるのは後日のことで、二
番目の兄・炳午は、東京の哲午に送った手紙の中で、義母の境
遇に同情し、再出発を応援するという。この手紙に促されるよ
うに、哲午は義母への感情を改めていくのだが、二人の対応が
趙家を前提にしている点には注意が必要だ。炳午は再婚後の家
が自身らと同じ五人兄弟であることから、「もう一度我々を育
てるような気持ちになっているのではなからうか」（八一）と推
察する。また哲午は、祖父母や父の代わりに「趙家の人生を送っ
てきた人として」（九五）義母が帰国を果たすのだと思い、自
身を抑制する。二人の理解と自責は、家族としての立場と折衷
して示されたものといえよう。

一方で、義母の語りは、哲午や兄の手紙を経由し、間接的に
趙家の兄妹以外の人物らにも届く。哲午の友人・西条と哲午の
妻・安熙である。田崎英明は、「証言」を語る声と聞く耳には
つねに「ずれ」があるという。そのひとつは、語り手と聞き手

の間で証言が一致しないことを指す。もうひとつは、もとの聞き手と異なる人物に語りが届けられることで、証言の響きが変わったり、それまで証言と思われていなかった声が、見出されるようになったりすることである。田崎は、そのような「ずれ」によって、「循環という閉じではないようなもの」として証言が我々のもとに届くし、我々はまたそれを人に向かって語らなければという気にもなってくる」のだとした。³¹本作に即していえば、「家」を理由に義母の言い分を認める哲午と次兄と、「独白」には「ずれ」がある。そして、次節から検討するように西条と安熙も、哲午とは異なる応答を見せるのだ。その様相を、まずは西条から検討してみよう。

四 「独白」の反響

西条は、哲午の高校時代の友人で、当時「千代田」と名乗っていた哲午が、在日朝鮮人であることを打ち明けた唯一の人物である。高校時代の回想において、哲午が、自身の本名が「趙」であり、「おれは、朝鮮人なんだよ」と「告白」したとき、「日本人だつて朝鮮人だつて、どっちだっていいじゃないか。気にする方が変だよ。おれの前にいるのは要するに君なんだ。それでいいじゃないか」(六二)と返される。哲午はもどかしさを覚えるが、西条には理解されない。哲午の発話行為をめぐる齟齬は、「カミングアウトの失敗」³²と理解できよう。カミングア

ウトの要点は、「情報の伝達」ではなく、語る側と語られる側の双方向的な行為によって生成する「新しい関係性をめぐる実践」にこそある。³³しかし、哲午の決死の「告白」は、ごく自然に、それを裁決する立場に身を置く西条に、変化をもたらしていない。

家族会議の後、哲午は、「わが家の危急を打明けたい衝動」(六〇)に駆られ、一〇年ぶりに西条に会おうと、電話でふたび本名を告げる。補足すると、作品発表に前後する一九六〇年代後半、兵庫県下の高校では朝鮮人と被差別部落出身の生徒らが学園闘争を展開し、「部落民宣言」と「朝鮮人宣言」の萌芽が生じていた。³⁴島崎藤村『破戒』を引きあいに出した「告白」の回想と二度の名乗りは、これをふまえたものだろう。哲午から帰郷の事情を聞いた西条は次のようにいう。

「趙——」／沈黙をやめたとき、西条は哲午の本名を呼んだ。(中略)

「きみの家庭で現に起こっている不幸はおれにとつてつらい。おれという日本人にとっては羞かしさすら感じるんだよ。こんな形で言うのが適切かどうかしらぬけど、きみん家の悲劇は日本の朝鮮合併に端を発しているんだもん。もし植民地化されていなければ決して起こらなかったそんな家庭悲劇、それがきみの家の哀しみだと言う気がしてならぬのだ。おれはついまいしがたそんなことを思っ

ハツとしたんだ。あの時代のこと、が今にまで尾を引き、しかも友人のきみの家庭で起っているなんて。やつとおれは高校時代にきみが告白したつらさもわかるような気がしてきたよ。あのとき朝鮮人だと告げられてもおれはそう驚かなかった。きつとおれ自身に偏見がなかったせいだろう。そのかわりどこかで無知だったんだと思うんだ。(中略) なにかおれたち日本人はきみら朝鮮人のもつ不安や不幸を身近に知らない、そのことが羞かしいし、つらい気がしてさ」(七五)⁽³⁵⁾

西条がかつての「無知」に言及することは、哲午の決意を一蹴できることに、日本人としての権力があつたと認めることでもある。⁽³⁶⁾ 再会において、いちど失敗したカミングアウトは、時を経て引き受け直された。

では、西条の変化は、何に起因するものか。哲午が再会を思いついた契機は、「異常な深夜の家族会議の反動」(六〇)とされる。哲午が西条に語るのには、家族会議と「独白」を受けた「逡巡」(七四)だ。もともと哲午は、父の一周忌の際、義母に再婚を勧めたことすらあつた。哲午が思い悩むのは、断られると期待して勧めた再婚話が現実味をもち始めたというだけでなく、「独白」によって、豊子と義母の苦難があらわになり、「一見何ともないように過ごしていても、憎しみを持っている」(七四)ように一家が感じられるためだ。むろんこの場面での語り手

は哲午であり、西条が義母の声を直接に耳にしたわけではない。しかし哲午は「独白」を自身の中で完結させえなかったからこそ、西条に語る。そのような意味で、哲午の語りには、義母の「独白」の響きが折り重なっている。西条の変化は、かつての哲午の葛藤が理解されたというだけでなく、義母の「独白」が別の宛先へ届けられたことを示すものだろう。

炭鉱町に生まれた西条が、再会時には閉山間際の炭鉱の生協で働いていることも象徴的だ。本作の発表に前後して、「脱・石炭」的状況が急速に進行したことを受け、北海道では二〇〇の炭鉱のうち七三が閉山する。⁽³⁸⁾ 樺太に渡った多くの朝鮮人の居住地が炭鉱地域であつたことを思えば、西条が哲午一家に透かしみる「朝鮮人のもつ不安や不幸」は、戦前・戦中の樺太の炭鉱への移動を磁場に生じた経験でもある。哲午が媒介する「独白」は、西条に至り、家族の悲劇としてだけでなく、「朝鮮合併に端を発している」日本の歴史として受け取られているのだ。次に妻・安熙である。再婚を決めた義母のことを、二人は幼い息子に、亡くなったことにしていた。先に、次兄から届いた手紙を読んだ安熙は、このような哲午の態度を「オモニの痕跡を趙家から消そうとする大人の押しつけ」(二〇)という。安熙は、哲午の趙家への執着を看破し、義母を家の犠牲とすることを諫める。義母の決意を後押しする際、安熙は、大学院に通う自身と異なり、小学校に通わず、家計簿に使う数字の書き方を知らなかった義母には想像も及ばない苦労があつたはずであ

り、だからこそ、その決断を理解するべきだというのだ。さらには、かつて樺太で義母が酌婦として働いていたことが安熙から語られる。一章で、実は豊子の実母は義母の友人で、酌婦だったと仄めかされているのだが、安熙の言葉は、義母が直接語ったのではない経験を補い、「独白」に新たな輪郭を与えるものだ。

哲午らの暮らしていた樺太・真岡近辺では、基幹産業となる大泊・泊居・豊原・真岡・落合の製紙・パルプ工場が正前期に各地に建設されたことで建設作業員が流入し、第一次大戦による好況とともに、売買春営業が拡大する。原則として、日本人女性以外の芸妓・酌婦が認められていなかった樺太では、一九二五年に日ソ基本条約が締結され、北サハリンから移住してきた朝鮮人によって料理屋が開業されたことで、多数の朝鮮人酌婦が確認されるようになる。⁽⁴⁰⁾一九二五年時点で、朝鮮半島を除く帝国日本内では、台湾も含めた帝国領内全体の朝鮮人酌婦のうち、約六八パーセントが樺太に集中していた。しかし、建前上は日本人男性と朝鮮人男性が、ともに同地の「国内化」を進める原動力として同一視された一方、朝鮮人酌婦は、日本人男性にとっては「好奇心」にみちた「玩弄物視」の対象で、朝鮮人経営者にとっては帝国における地位を上昇させる商売道具とみなされた。⁽⁴¹⁾

哲午は安熙の態度を、兄の手紙に触発されたものと捉えるが、その主眼は異なる。手紙の中では、家庭内で義母が顧みられてこなかったことのみが語られるのに対し、安熙が補完する

のは趙家にやって来る以前の経験だ。それは、趙家に入ってから後の、家族の離散をめぐる物語としては前景化されない。安熙は、「痕跡を趙家から消そうとする」ことに対し、趙家の母としての姿を残そうと訴えるだけでなく、義母の過去の痕跡を言い添えている。そのような意味で、安熙は趙家の母としてだけではなく、樺太に渡航した朝鮮人女性の訴えとして、その声を受け止めたのだといえよう。そのとき、義母の「独白」は、戦前・戦中から樺太の日本人社会と朝鮮人社会の双方から抑圧され、戦後も家族に身を捧げた女性の経験ゆえに発されたものとして響いている。

最後に、西条や安熙と、哲午の義母の「独白」に対する受け取り方の関係を検討したい。義母の「独白」の直接の「聞き手」であった哲午は、その言葉に戸惑い、だからこそ、それを他者に伝える役割を担う。大門正克は、聞き手は語り手の語りを引き出す役割をもつだけでなく、たとえば戦争や植民地での体験を聞くとき、それをどのように受け止めたいのか、試行錯誤する姿によって、戦争や植民地をめぐる問題を浮かび上がらせるとした。⁽⁴²⁾義母の「独白」をあくまで家族の問題として受け止めようとする哲午の姿は、「家」から離れ、植民地期の朝鮮人女性の生をそのままに語ることが困難であったことを物語る。一方で、本作は、義母の再婚を家族の離散としてのみ描くのではない。哲午の逡巡によって、義母の「独白」は西条や安熙にも届く。そのような意味で、本作は、「独白」自体が力をもつ

ように、義母の声が哲午に影響を与え、それがさらに別の人々へも伝わっていくことを描き出しているといえる。

五 おわりに

本稿では、李恢成による二作を取り上げ、「樺太／サハリン」をめぐる開拓と占領が、二人の女性の生に与えた影響を考察してきた。『砧をうつ女』では、語り手が、祖母と父が母を語る声の「聞き手」となることで、死後にも、母をひとつの像に回収しようとする力学自体が浮き彫りにされていた。そのうえで語り手は、両者の語りに収斂しない述伊の姿が想像される余地を与えている。『またふたたびの道』では、義母の再婚と「独白」が趙家に転機をもたらすことと並行し、間接的な宛先である西条と安熙においては、義母の語りが「母」の喪失とは異なる文脈で受け取られていた。声は、「合唱」^{（3）}になるわけではなく、「単独性を残しながら、他者にぶつかり、反響を残し、新しい「声」を呼び覚ま^{（4）}す。『砧をうつ女』では、語り手は祖母と父の声に触発され、その声を残しながら、同時に母を張述伊として語る方法を模索していた。また『またふたたびの道』では、義母の「独白」によって逡巡する哲午の言葉は、趙家の悲劇としてのみでなく、義母の声を残したのとして西条や安熙に響く。そのような意味で、本稿で取り上げた二作は、語ること、あるいはその声を聞くことのもたらす動的な作用を、描いたものと

いえるだろう。

そして、そのようにして描かれる二人の「母」の物語は、樺太における基幹産業の開発に連動しており、炭鉱労働者、あるいは産業開発による人工流入とともに増加した酌婦としての朝鮮人女性の生の一端でもあった。近年の炭鉱研究では、二節で述べたように、特に朝鮮人女性に関わる資料に制約があり、森崎和江や井手川泰子による「聞き書き」が参照されることもある。^{（5）}李恢成によるテクストはむしろ小説であるが、歴史上に姿をあらわすことの難しい女性らの声を想像させるものでもある。新たな資料発掘が急がれると同時に、これまで問われることがなかったテクストから、樺太の朝鮮人女性らの姿を取り上げることが要請されていることを注記し、むすびにかえたい。

注

（1）天野尚樹「樺太における「国内植民地」の形成」『帝国日本移動と動員』今西一、飯塚一幸編、大阪大学出版会、二〇一八年、一一三―一四四頁。

（2）村田裕和「特集 廃墟の空間論・帰郷の反美学」『フェンスレス』三号、二〇一五年、二頁。

（3）朴裕河「一九六〇年代における文学の再編」『思想』九五五号、二〇〇三年、一〇四―一二五頁。平田由美『国

『家の物語』を組み替える』同誌同号、一二六―一四七頁。
（4）『内向の世代』をめぐるのは、以下を参照。竹永知弘「小

- 特集によせて——五〇年目の「内向の世代」——』『神戸大学国文論叢』五三号、二〇一八年、三八〜四一頁。一方、近年は内向の世代の作品を非政治的とみなすのではなく、社会性を指摘する研究もある。たとえば、山本昭宏「記憶する身体、「群棲」する時空間」（同特集、七三〜八五頁）の黒井千次論や、李承俊『疎開体験の戦後文化史』（青弓社、二〇一九年）など。
- (5) 林浩治「在日朝鮮人文学」とは何か『世界文学』九六号、二〇〇二年、八頁。林は、在日朝鮮人文学の史的展開を辿るなかで、磯田光一（松原新一、秋山駿『戦後日本文学史・年表』講談社、一九七九年）や久保田正文『昭和文学史論』（講談社、一九八五年）を引き、「内向の世代」と在日朝鮮人文学が対照的に見られてきたことをまとめている。
- (6) 「またふたたびの道」群像新人文学受賞時の選評より、安岡章太郎「文体の特性」『群像』二四巻六号、一九六九年、一三八頁）。
- (7) 李恢成『伽椰子のために』（新潮社、一九七〇年）刊行時のリーフレットより、大江健三郎「われわれのための李恢成」を参照。ただし引用は、北海道立文学館編『李恢成の文学』（北海道立文学館、二〇一二年、三四〜三五頁）に拠る。
- (8) 「正統」という言葉は、「またふたたびの道」群像新人文学受賞時の選評の、大江健三郎「正統的な在日朝鮮人文学」オンラインテイク
- （注6と同掲書、一三四頁）に拠る。文学史を記述する際にも、たとえば竹田青嗣が「在日の文学」を「民族的アイデンティティの危機のなかでの、彼らの苦悩と抵抗を強くあらわし」た文学とし（『在日の文学』『戦後史大事典一九四五―二〇〇四 増補新版』佐々木毅、鶴見俊輔ほか編、三省堂、二〇〇五年、三三〇頁）、川村湊はこれを引き、竹田の定義する文学にはとくに第二世代の文学が当てはまると、その担い手に李恢成を挙げる『戦後文学を問う』岩波書店、一九九五年、二〇一〜二〇五頁）。
- (9) たとえば、金墾我『在日朝鮮人女性文学論』（作品社、二〇〇四年）、宋恵媛『在日朝鮮人文学史』のために（岩波書店、二〇一四年）、康潤伊「在日朝鮮人文学研究——「語る資格」をめぐる」（二〇二〇年に早稲田大学へ博士論文として提出）など。
- (10) たとえば、これまで看過されてきた「聞き書き」の歴史性を整理したものに、大門正克『語る歴史、聞く歴史』（岩波書店、二〇一七年）がある。また、子どもの戦争体験を、聞き取りから歴史的に位置付けようとしたものに、森茂起、港道隆編『戦争の子ども』を考える』（平凡社、二〇一二年）がある。
- (11) 佐藤泉「記録・フィクション・文学性」『思想』一一四七号、二〇一九年、六一〜七五頁。
- (12) 佐藤泉『苦海浄土』のさまざまな「栄耀栄華」、『叙説』

二〇一三年、二四―三九頁。

- (13) 成田龍一『戦争経験』の戦後史』岩波書店、二〇一〇年、一九一頁。

- (14) 引揚げの経緯については、作中では日本人と偽って密航したとあるが、実際には、長兄が日本人の引揚げ業務を取り扱う民政署の朝鮮語通訳をしていたことから、祖国帰還の希望をソ連人上司に訴え、「朝鮮国籍」のパスポートを手に入れるに至ったのだという。参照は、三田英彬『棄てられた四万三千人』（三一書房、一九八一年）ほか、梁明心「李恢成文学における「サハリン」」、『国文論叢』四一号、二〇〇九年、三八―四八頁。

- (15) 金貞愛「拡散する〈身勢打鈴〉」、『第二六回国際日本文学研究集会会議録』国文学研究資料館、二〇〇三年、一四一―一六二頁。また、金貞愛「日本における在日コリアン文学受容の一側面」、『文学研究論集』三二号、二〇一四年、一―一八頁）も参照。

- (16) 西成彦「在日朝鮮人作家の「母語」問題」、『バイリンガルな夢と憂鬱』人文書院、二〇一四年、一四九―一八五頁。山崎正純「李恢成論」、『戦後（在日）文学論』洋々社、二〇〇三年、七一―九七頁。

- (17) 林相珉「仕方なくやる」生』『比較社会文化研究』一九号、二〇〇六年、一四五―一五六頁。

- (18) 朴裕河、注3と同掲書一六―一九頁。

- (19) 北海道立文学館、注7と同掲書、付属年譜。実際には、一九四〇年とされる。

- (20) 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配 下』青木書店、一九七三年、五七―五九頁。

- (21) 外村大『朝鮮人強制連行』岩波書店、二〇一二年、五八、九七―一〇〇頁。

- (22) 朴裕河、注3と同掲書、一六―一七頁。

- (23) 李恢成「著者から読者へ どうかわが故郷をたずねてほしい」『またふたたびの道・砵をうつ女』講談社、一九九一年、二七四頁。

- (24) 西成彦、注16と同掲書、一五五頁。

- (25) 李恢成『可能性としての「在日」』講談社、二〇〇二年、一三三―一四七頁。

- (26) Smith, Donald, W. (2016). Digging through Layers of Class, Gender and Ethnicity: Korean Women Miners in Postwar Japan. In: Ikuntala Lahiri-Dutt and Martha Macintyre (Ed.), *Women Miners in Developing Countries: pit women and others*, 111-130. New York: Routledge.

- (27) 梁明心、注14と同掲書。

- (28) 川原崎尚子「李恢成「またふたたびの道」試論」、『藤女子大学国文学雑誌』三七号、一九八六年、一〇三―一一八頁。

- (29) 金貞愛「樺太／日本／朝鮮の異邦人」、『跨境 日本語文学研究』四号、二〇一七年、一四一―一五二頁。

(30) たといえば、湯浅朝雄は義母をめぐる一家の変遷を骨組みと認めながらも、「作品の主要な意味をそこに焦点をあてて見ようとは全く思わない」と述べている。参照は、「侮蔑と誇りと」(『新日本文学会』二四巻七号、一九六九年、二〇三頁)。

(31) 崎山政毅、田崎英明、細見和之『歴史とは何か』河出書房新社、一九九八年、一九〇頁。本書は鼎談から成り、ここでは慰安婦証言をめぐる論が展開されている。

(32) 外見から判断し得ないアイデンティティを口にする点から、「在日の「本名宣言」といわれる一大決心は、同性愛者の「カミングアウト」ときわめて似た現象」であるという。参照は、キース・ヴィンセント、風間孝、河口和也『ゲイ・スタディーズ』(青土社、一九九七年、一五二頁)。

(33) 森山至貴『ゲイコミュニティの社会学』勁草書房、二〇一二年、一二三頁。

(34) 金一勉『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』三一書房、一九七八年、二二三、二四頁。

(35) この発言は単行本刊行時に加筆された箇所である。新人賞受賞時に野間宏から、西条という人物が生かされていない、との指摘があったことに応答して修正されたものとする指摘がある。参照は、金貞愛、注29と同掲書、一四九頁。

(36) イヴ・コゾフスキー・セジウィックは、カミング・アウトとは「権力を伴う無知」をそれが装う空洞や空白として

ではなく、「重みのある、領有された、認識論上の場」たる「無知」として暴く行為だとする(外岡尚美訳『クロゼットの認識論』青土社、二〇一八年、一一〇頁)。

(37) 島西智輝『日本石炭産業の戦後史』慶應義塾大学出版会、二〇一一年、三四七頁。

(38) 杉山伸也、牛島利明「序章」『日本石炭産業の衰退』杉山伸也、牛島利明編、慶應義塾大学出版会、二〇一二年、一五頁。

(39) 竹野学「樺太からの日本人引揚げ(一九四五～一九四九年)」『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究』今泉裕美子、柳沢遊、木村健二編、日本経済評論社、二〇一六年、二三四～二三五、二五八頁。竹野によれば、一九四二年時点の樺太では、総人口四〇万四九二〇人のうち、日本人は三八万三〇八九人(九四・六%)、次いで朝鮮人が二万一九九九人(五・三%)とされる。そのうち朝鮮人の居住地域は炭鉱地域が中心だったという。注記すれば、一九三三年から石炭需要が急騰したことで樺太の炭鉱開発は内地移入用に本格化しており、李恢成の両親が樺太に渡ったのもこの時期と考えられる。参照は、三木理史「炭鉱で生きる人びと、一九二五～三六六年」『樺太四〇年の歴史』原暉之、天野尚樹編、一般社団法人全国樺太連盟、二〇一七年、一五七～一九六頁)。

(40) 井潤裕「明治大正期の樺太・サハリンにおける公娼と半

公娼」注1と同掲書、二〇一八年、二四〇～二七四頁。

(41) 天野尚樹、注1と同掲書、一三〇～一三八頁。

(42) 大門正克、注10と同掲書、八九頁。

(43) 西成彦『声の文学』新曜社、二〇二一年、一一五頁。

(44) Burton, Donald, W. (2014). *Coal-Mining Women In Japan*. New York: Routledge.

【付記】本文引用は、『(在日)文学全集第四卷 李恢成』(磯貝

治良、黒古一夫編、勉誠出版、二〇〇六年)に拠り、論文
中では頁数のみを表記した。ルビや参考資料の副題は適宜
省略した。引用文中の(中略)、／(改行)、(注記)
は奥村による。また、歴史性を考慮し一九〇五年のポーツ
マス条約から四五年時点まで日本領とされていた土地を
「樺太」と表記し、ソ連統治下に置かれて以降は「サハリン」
と表記する。なお本稿は、日本学術振興会科学研究費奨励
金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。ま
た本稿の一部は、日本近代文学会・昭和文学会・日本社会
文学会合同国際研究集会(二〇一九年十一月二八日、於二
松学舎大学)でのパネル「関係性の回路を読み直す——日
本語文学研究における脱中心化の〈その先〉」における口
頭発表による。会場内外でご指導いただいた皆様に感謝申
し上げます。